平成27年度埼玉県諮問図書審査票

（乳幼児）

諮問番号	図書名等	内　　容	認定基準	推奨の有無
1450	いえでをしたくなったので ほるぷ出版 リーゼル・モーク・スコーペン／文 ドリス・バーン／絵 松井るり子／訳	家出をしたくなったきょうだい4人は、荷物をつめて、みんなのすきな木の上へひっこした。ところが、ふきとばされて、池へひっこす。池でいかだを組むが沈没！どうくつ、浜辺と移動するが、次々にじゃまがはいる。ひっこすごとに荷物が増えるのも楽しい。 選定理由 「行って帰る」というこどもたちが安心するストーリー。モノトーンで表情豊かに描かれている絵が、詩のようにリズミカルな文によくあっている。	(5) (6)	
1451	ねこくんいちばでケーキをかった　ロシアのわらべうた 岩波書店 ユーリー・ワスネツォフ／絵 たなかともこ／編訳	ロシアの14のわらべうたと1つの昔話の絵本。たくさんのどうぶつたちが色彩豊かに生き生きと描かれている。くりかえしの言葉が多く、声に出して何度も読みたくなる絵本。こどもたちによく知られている「おおきなかぶ」も紹介されている。 選定理由 言葉の語感やリズムを楽しむことができるわらべうたを紹介している。ロシアの自然やこどもたちが素朴で力強く描かれていて、異文化に触れることができる。	(5) (8) (9)	
1452	ぽんちんぱん (0．1．2．えほん) 福音館書店 柿木原政広／作	ぱんをちぎって、かおをつくるよ。まずは、しょくぱん「ぱんぱん　しょくぱん　ぽんちんぱん」。ロールパン、ドーナツ、フランスパンにあんぱん、たのしいリズムでいろいろなぱんにかおができるよ。 選定理由 白地に対象のパンだけが写っている写真は、余計なものがなく対象に集中できるので、幼い子に適している。感触が伝わってくるようなパンが魅力的。最後が「ぽんちんぱん」で終わる文も言葉の響きが心地よい。	(5) (9)	
1453	はじめは　タマゴ 評論社 ローラ・ヴァッカロ・シーガー／さく　ひさやまたいち／やく	はじめは、タマゴ。そして、ヒヨコからニワトリになる。はじめは、オタマジャクシ。そして、何になるでしょう？ほかにも、いろいろな「へんしん」がある！ページに穴があいていて、考えるヒントになっているよ。 選定理由 生き物の成長がわかりやすく描かれていて、小さい子が自然を理解する助けになる。絵の一部にあいている穴が、左右でうまく色のバランスが取れていて、よく考えられたしかけ絵本。	(1) (2) (5)	
1454	どんぐり 光村教育図書 エドワード・ギブス／作　谷川俊太郎／訳	ちっちゃなきいろいどんぐりが、じめんにおちた。しろねずみが食べようとすると、「いまは食べないで　いまにもっとおいしくなるから」とどんぐり。おれんじりす、あおどりと次々やってくるが、食べないでとお願いされる。さあ、どんぐりはどうなるのかな？ 選定理由 ちいさなどんぐりが芽を出し、根を張って、大きな樫の木になるという植物の成長を通して、動物たちの命を支えていることが描かれていて、自然のしくみを理解することができる。動物たちとどんぐりのやりとりが繰り返しで楽しい。	(1) (4) (5)	

平成27年度埼玉県諮問図書審査票

（小学校低学年）

諮問番号	図書名等	内　　容	認定基準	推薦の有無
1455	ダンゴムシだんごろう すずき出版 みおちづる／作　山村浩二／絵	ダンゴムシのだんごろうは貧しい「石のすきま村」でおっかさんと99匹の兄弟たちと暮らしています。ある日だんごろうは、ハンミョウから「ダンゴムシ天国」の話を聞きます。そこで、いつもお腹をすかせている家族のためにダンゴムシ天国を探す旅に出る決意をし、家族を残して旅立ちます。旅の途中で、触覚を片方なくしたアリや弱虫のカブトムシに出会い、事件を解決していく愉快な旅日記です。 **選定理由** 低学年の子どもたちは、昆虫が大好きです。そのお気に入りの虫たちが繰り広げる物語にきっと子どもたちは夢中になるのではないでしょうか。「なりはちいさくても、むねの中はあついおもいでいっぱいの」ダンゴムシだんごろうが、旅の途中に出会った虫たちの事件を解決していきます。前向きに事件と向き合うだんごろうから元気がもらえるお話です。	（4） （6） （7） （9）	
1456	赤のはんたいは？ゆかいなことばつたえましょうがっこう くもん出版 宮下すずか／作 市居みか／絵	きつねのズミくんは、いつも反対のことを言ってばかり。そんなズミくんに、クラスメイトは困っています。そして、ついにはお日様を怒らせてしまい、そのせいで小学校でも大混乱。ズミくんをこらしめるためにクラスメイトのケイちゃんワカちゃんミウちゃんの仲良し「トライアングル」が難問「赤の反対は？」を考えます。さて、うまくいくでしょうか。そんな4人のやりとりを太陽があたたかく見守っています。 **選定理由** 「ズミくんだから、しかたないよ。」みんながあきらめても、自分の考えを相手に伝え、相手の言うことをよく聞けば、理解し合うことができる。お互いに今までなかった感情が芽生える。ゆかいなことばしょうがっこうの4人の仲間が、そのことを低学年でもわかるように伝えてくれます。	（4） （6） （9）	
1457	りゆうがあります PHP研究所 ヨシタケシンスケ	ハナをほじるクセ、ツメをかむくせ、びんぼうゆすり…。お母さんは、それを見つけると、「行儀が悪い。」って怒る。でも、それにはりっぱな理由があるのです。理由があれば、お母さんも文句は言えない。ぼくとお母さんのやりとりがとてもユーモアに描かれています。 **選定理由** ついやってしまうけれど、行儀が悪いとしかられる癖。その癖を正当化するために、僕は一生懸命考えます。それは、「えっ、そんな理由！」と驚いてしまうようなものですが、読んでいると自分でも理由を考えたくなる楽しいお話です。さすが、「ぼく」のお母さん。最後はお母さんも、自分の癖の理由を説明するのですが…。ほのぼのとした語り口と挿絵で、読んだ後、友だちに話したくなるのではないでしょうか。	（6） （9）	
1458	こころとしんぞう 保育社 中川ひろたか/文 村上康成/絵	運動会の前日は心臓がドキドキして眠れない！走る前も、走ってからもドキドキ。そしてすきな子を見てもやっぱりドキドキ…。「ぼく」のからだのなかで心臓が忙しく働いている様子と、仕組みを分かり易く解説してくれます。心臓とこころのエピソードから、自分が生きていることの不思議・奇跡を実感できる一冊。 **選定理由** 好きな子に会うと、むねがドキドキする。考えるのは脳のはずなのにどうしてだろう。こんな疑問に答えてくれる絵本です。その他の2つのドキドキの理由もわかりやすく説明し、3つのドキドキの違いがわかる科学？絵本です。「心臓はこころそのもの」ということについて、大人も改めて納得できる絵本です。	（5） （9）	
1459	バルト　氷の海を生きぬいた犬 徳間書店 モニカ・カルネシ 作・絵　中井 貴恵 訳	2010年1月、ポーランド。リスを追いかけていた一匹の犬が、いつの間にかビスワ川を流れていた氷に乗って流されてしまいます。それに気づいた人々が、小さな命を救おうとしますが、とうとうバルト海へ。2日後、海洋調査船バルト号により、ようやく犬は救出されたます。実際に起こった出来事をもとに、冷たい海に落ちても懸命に生きようとする犬とその犬を救おうとする人々の姿が描かれています。 **選定理由** この本の冒頭には、「その勇気と思いやりにあふれた行動をたたえて、海洋調査船バルト号の乗組員たちにこの本をささげます。」と書かれてあります。1匹の犬を救うために、乗組員たちは、氷の海に小さなボートをおろし、命がけで救助します。また、氷の海に何度落ちても這い上がる犬。その2つの姿に、命の尊さを学ぶことのできる本です。	（1） （8） （9）	

平成27年度埼玉県諮問図書審査票

（小学校中学年）

諮問番号	図書名等	内　　容	認定基準	推奨の有無
1460	超救助犬リープ 学芸みらい社 石黒久人／文　あも～れ・たか／絵	災害救助犬のボーダー・コリーの「リープ」。〝担当〟といっしょに訓練をして、災害救助犬として被災地へ出かけ、助けを求めている人を「におい」をてがかりに救助していた。しかし、ある日、火事の現場で人を助けようとした〝担当〟に余震が襲いかかる。災害救助犬、そして訓練士の仕事を知ることができるとともに、人と人、人と動物をつなぐ愛について考えることができる感動的なお話。 **選定理由** 「救助犬は災害の時にどのように役に立つのか」「救助犬にもっと活躍してもらうためにはどのような制度が必要なのか」など、災害救助犬の理解と課題を考えることができる「総合的な学習の時間」にも活用できる本。救助犬の視点で書かれており、第25回「日本動物文学大賞」を受賞した作品で、人と人、人と動物の絆、愛について深く考えられる本である。	（1） （3） （4） （7） （8）	
1461	先生、しゅくだいわすれました 童心社 山本悦子／作　佐藤真紀子／絵	こんな担任の先生がいたらいいなと、読んだらだれもが感じるだろう。ある日、宿題を忘れたゆうすけは先生に、「聞いた相手が楽しくなるような上手なうそだったら許してあげる」と言われ、どうして宿題ができなかったのかを語り出す。「明日はぼくが忘れます」「次の日はわたしが」「じゃあ、宿題忘れる順番を決める？」と言い出す子ども達。どうなっていくのかな、このクラスと思いながら、それぞれのうそ話に引き込まれていく楽しい本。 **選定理由** 「宿題をやる」のは子どもたちにとって「必ず」取り組むべき課題であり、「忘れると先生に叱られる」というのは、これまた「必ず」くるであろう結果。しかし、このクラスの担任は、真逆の発想で「楽しいウソ」を受け止める。子どもたちは、楽しみ、そして苦しみながら宿題ができなかった理由の長い創作話を考え始める。先生と子どもたちのほほえましい、温かな教室の雰囲気が伝わってくる話。	（2） （4） （6）	
1462	ヒワとゾウガメ 佼成出版社 安東みきえ／さく・ミロコマチコ／え	ゾウガメとヒワ。それぞれの寿命は違うけれど、一緒にいることで、友情が芽生える。「ぼくがひゃくねん、わすれずにいるよ」と、声の出ないゾウガメは胸の内でそっとヒワに呼びかける。ヒワは、ゾウガメの心の声を感じ取る。心温まるお話。 **選定理由** 「大切な人はいつだっていちばん近くにいる」と、本を読み終えた人の心に響く内容の絵本である。絵も紙面いっぱいに広がって魅力的である。ゾウガメと小鳥のヒワ、体の大きさも寿命も違い、言葉を交わし合うこともできない。いつもは甲羅の上でお話しするヒワが「ゾウ」を探しに大海原に旅立つ。少しこうらが寂しくて、当たり前にいたものを失ってから気づく、大切な存在。友だちっていいなと素直に感じることができる本である。	（1） （4） （5）	
1463	読書マラソン、チャンピオンはだれ？ 文溪堂 クラウディア・ミルズ/作　若林千鶴/訳 堀川理万子/絵	競争といえば、必ず登場するのがライバル。本を読むことが大好きな3年生のケルシーは、校長先生提案の全校読書マラソンに意気込むが、最大のライバルはサイモン。2000冊マラソンを読破するために大切なことはなんだろう。目標達成を目指しながら、成長していくケルシーや級友たちの姿を感じることができる本。 **選定理由** 1ヶ月で何冊の本を読めるかという「読書マラソン」に挑戦するストーリーである。物語の中には、たくさんの児童文学作品が登場し、読後、実際に手にとって、読んでみたくなる波及効果もある。読書が苦手な友だちのことを考えて、試行錯誤しながら行動していく子どもたちの様子にも心打たれる。	（4） （6） （9）	
1464	ふしぎなともだち くもん出版 たじまゆきひこ	島の小学校に転校してきたゆうすけのクラスには、ひとりごとを言ったり、みんなと違うことばかりしている「やっくん」がいた。どうつき合ったらいいのか、考え込んでいたゆうすけだったが、共に生活していくうちに、少しずつわかり合えるようになる。「共に育ち、共に生きる」こと、友だちを思いやる気持ちはみんな同じ、大切な仲間ということが心に残るお話。 **選定理由** ひとりごとを言ったり、みんなと違うことをする「やっくん」、自閉症の「やっくん」と共に生活していくうちに、少しずつわかり合えるようになるぼくの心の内が温かく描かれている。二人の、成長し互いを支え合っていく姿が、心を打つ絵本。型染めで染め上げた絵によって、お話の世界を純粋に、素朴に表現している。第20回「日本絵本賞大賞」を受賞した作品。	（2） （3） （4） （7）	

平成27年度埼玉県諮問図書審査票

（小学校高学年）

諮問番号	図書名等	内　　容	認定基準	推薦の有無
1465	コスモスの謎　色も香りもチョコそっくり！？チョコレートコスモス大研究 誠文堂新光社 奥隆善／著	とても楽しい科学の本。チョコレートコスモスに興味を持ち、頭だけで考えて研究するのではなく、実際に栽培し、失敗を繰り返しながら、偶然の発見から栽培に成功していく様子がよくわかる。難しい遺伝の内容も小学生にわかるように簡単な言葉で説明してくれている。 作者の小学校時代の様子もわかり、理科ってこう楽しむんだ、ということがわかる。 **選定理由** 小学生の子供が科学に興味をもつきっかけになる本である。作者がなぜチョコレートコスモスを研究するようになったのか、試行錯誤をしながら、チョコレートコスモスの栽培に成功するまでの様子、作者の子供時代はどんなことに興味を持っていたのか、などがわかり、科学（理科）って楽しいんだな、と思える本になっている。	（2） （5） （6）	
1466	一年後のおくりもの あかね書房 サラ・リーン／作　宮坂宏美／訳　片山若子／絵	お母さんが事故で突然亡くなり、その1年後にキャリーは何もしゃべらなくなる。家族とお母さんの話がしたいのに話ができないもどかしさを、しゃべらないという行為で訴える。 障害がありしゃべれない少年との友情と野良犬との交流を通して、キャリーが言葉を取り戻していく物語。一年後のおくりものは何か、最後に分かり感動する。 **選定理由** 突然の事故で母を亡くしたキャリーが理解されない自分の思いを言葉を発しないことで訴えていく。周囲の大人たちの関わりやしゃべらないことで気づく病気の少年サムとの友情がキャリーを成長させていく。死ぬ間際に母が残した家族への思いやりが心を打つ物語であり家族の在り方も考えさせられる。	（1） （4）	
1467	ゾウがとおる村 さ・え・ら書房 ニコラ・デイビス／文　もりうちすみこ／訳	象が通ると、今まで一生懸命作っていた作物が一瞬でだめになってしまう。そんな日常に疑問を持ちながら、開発か、象との共生かをウィレンが子供なりに考えていく。人前で上手く話せないウィレンが最後に語るシーンは成長を感じ感動する。森が開発されなくてよかった、と最後に思える本当にあった話を物語風に語っている作品。 **選定理由** インドに住む少年ウィレンの村は、森林に囲まれ昔からの焼畑農業で暮らしている。そんな村人たちを苦しめるのは洪水などの自然災害とすみかを失ったゾウが畑を荒らしたり家を破壊したりする被害だ。開発をするか自然を守るか悩む村人とウィレンの心情が身につまされる物語。自然を守って生きることの大変さや大切さを考えさせられる。	（1） （3） （5） （8）	
1468	六千人の命を救え！　外交官・杉原千畝 PHP研究所 白石仁章／著	第二次世界大戦の頃、外交官としてリトアニアに赴任した杉原千畝の物語。子どもにわかりやすく、戦争の悲惨さやユダヤ人迫害の様子が語られている。人を助けようという信念が中心なので、悲惨さの中にも希望がある、という視点で書かれていて読みやすい。人々の命を救うために信念を貫き通した杉原千畝の偉大さがよくわかる。感動する伝記となっている。 **選定理由** 「命のビザ」で知られる杉原千畝の生涯を描いたノンフィクション。杉原の名やその功績は知られるようになってきたが、そこに至るまでの彼の生き方やその後の人生を知ることができる。杉原の偉大さに感動する伝記となっている。	（1） （4） （7） （8）	
1469	月へ行きたい 福音館書店 松岡徹　文・絵	満月の夜、男の子が月に行く方法を考え始める。どんな方法で月に行くのか。色々考えてみると楽しくなる。奇想天外な発想が実は実用化されていくのかも、と希望を与える。「大きな夢を持っていいんだよ。」と現代の子供たちに語りかけている。後半は、ロケットの仕組みが詳しくかかれていてとても興味深い。 **選定理由** 月へ行く方法を考えてみると、おもしろい。こんな事は無理、というアイディアが実用化されていくのかもしれない、と夢を大きく持てる、そんなきっかけになる本である。宇宙ロケットの仕組みも図入りで詳しく描かれていて、とても興味深い内容になっている。科学好きの子が増えるきっかけになる本である。	（2） （5） （6）	

平成27年度埼玉県諮問図書審査票

（中学校）

諮問番号	図書名等	内　　容	認定基準	推奨の有無
1470	風味さんじゅうまる 講談社 まはら三桃	老舗和菓子屋「一斗餡」に生まれた風味は、中2の女の子。元気のいい祖母、父、母、イケメンの兄の5人家族。そんな一斗餡に嵐の予感。お菓子コンテストSS－1に出場することになったり、和菓子職人目指して修行中の兄が逃げ出して来たり…。 **選定理由** 友人関係の難しさや和菓子職人としての資質が高い兄への嫉妬など、思春期ならではの悩みを乗り越えていく主人公に共感しやすい一冊。うまれが「老舗和菓子屋」であることにも興味が引かれる。登場人物は多いが、一人一人がきちんと描かれていて、話に厚みがある。しかし、スピード感を失わず読みやすい。	（2） （3） （4） （6）	
1471	一人っ子同盟 新潮社 重松清	「一人っ子」が珍しかった時代、きょうだいのいない少年少女は「同盟」を結んだ。団地に住む彼らは小さな社会で必死に生きていた。「どうにもならないこと」に立ち向かい、悩み、もがいていた。時代が変わっても、変わらない子どもの情景がここにある。 **選定理由** 昭和40年代の団地を舞台に「一人っ子」の姿を通して、子どもたちの生きる小さな、しかし大切な「社会」を描いた作品。「昭和」というと懐古の情を彷彿とさせるが、現代の若い読者にも受け入れられると考える。それは子どもの心象風景を熟知している筆者の筆致から感じることができる。主人公の信夫と転校生の公子（通称ハム子）や登場人物の人間模様から、大人を見る目、社会を見る目などが描かれ、読後の充実感あふれる一書である。	（2） （3） （4） （6）	
1472	自分リセット　つまらない大人にならないために 河出書房新社 小山薫堂	「もしも〇〇だったら」と空想しながら、日常の「あたり前」をリセットする方法がたくさん！一つのことにとらわれず、多面的なものの見方が発見できる一冊。多くの小見出しがあり、短時間でも読みやすいので朝読書にもおすすめ。 **選定理由** 14歳の世渡り術シリーズ。平凡な毎日をちょっと面白くする方法を、放送作家・脚本家である著者が提案している。「もしも〇〇だったら」と空想しながら、日常の「あたり前」をリセットする方法が挙げられており、一つのことにとらわれず、多面的なものの見方が発見できる。多くの小見出しがあり、短時間でも読みやすい。固定観念で凝り固まった思考回路をほぐしてくれる一冊である。	（3） （4） （6）	
1473	夢をあきらめない 佼成出版社 田島隆宏	埼玉県在住の著者は、自由に動かせるのは口と舌だけという重度の障害を持ちながらも、あきらめなければやりたいことをやれる方法が必ずあるを実践し続けてきた。自作の写真や詩、書と共に自身の体験を語りかけるような文章で綴る。 **選定理由** 生い立ち、障害、物事に対する考え方の変遷などが、淡々と書かれている。エピソードなども整理されて分かりやすい。自作の写真、詩、書なども挿入されているので、著者の活動全般が分かるのも良かった。	（4） （5） （7）	
1474	あまねく神竜住まう国 徳間書店 荻原規子	伊豆の地に流された15歳の源頼朝は、北条の領主に引き渡され、命を狙われる。生きる意味を見失っていた頼朝だったが、かつて不思議な力で命をつなぎ止めてくれた笛の名手草十郎と妻の舞姫・糸世の力を借り、土地神と対峙しながら自らの運命を受け入れていく。壮大なファンタジー。 **選定理由** 史実を参考に書かれている。北条の領主に引き渡され、川の中州で暮らし始めた頼朝が、草十郎や糸世、嘉丙との生活、伊東の領主の息子である河津三郎祐泰との出会いと相撲勝負、密厳院での勤行を通して、一人前の男として成長し、伊豆の地に根を下ろしていく姿が生き生きと描かれている。頼朝が神竜となり、大蛇となってしまった姉の万寿姫を我執の苦しみから解放し、冷たい蛇から命がけで救おうとするシーンは迫力満点である。	（1） （4） （6）	

平成27年度埼玉県諮問図書審査票

（高校・青年）

諮問番号	図書名等	内　　容	認定基準	推奨の有無
1475	紙つなげ！彼らが本の紙を造っている 早川書房 佐々涼子	東日本大震災で壊滅的な被害を受けた日本製紙石巻工場が復活するまでの社員たちの記録。文化、社会活動がたくましく復活する事実が読者を勇気づけるに違いない。人々の健気さ、強さを改めて実感できる一冊だ。 **選定理由** 東日本大震災で被災した日本製紙石巻工場の復活を追ったノンフィクション。現場を丹念に取材し、工場復活にかける一人一人の声を拾い、そこに生きる人々の姿を誠実に描いている。私たちが普段何気なく手に取っている本の紙が、様々な思いの末にもたらされているのだと言うことを知る、良いきっかけとなる。	（1） （3） （6） （7）	
1476	本屋さんのダイアナ 新潮社 柚木麻子 著	二人の少女の成長を描いた青春物語。破天荒な母と二人暮らしで一風変わった名前に悩まされるダイアナと、両親に愛され不自由なく育てられた綾子は小学校で出会い、『秘密の森のダイアナ』という本を通して心を通わせる。父親探し、中学受験、自立と言った深刻なテーマを扱いながらも、少女たちなりの目線で問題解決に取り組む姿がみずみずしく描かれており、読後感もさわやかな作品だ。 **選定理由** 家庭環境の全く違う同い年で読書好きな二人の少女が、成長過程で直面する問題に悩みながらも、それを乗り越えてゆく姿に共感を覚える。様々な物語の名前が登場し、青少年の読書案内としても読める。	（4） （6） （9）	
1477	「自分」の壁 新潮社 養老孟司著	現代日本に生きる私たちの根底にある「個」という価値観は西洋からもたらされたものであり、その行き過ぎが生じた結果、実に様々な社会問題が噴き出ている。本来人間は単独の「個」ではあり得ず、環境とのつながりの中で生きてきた。「自分探し」は自分以外のものから探せ、という逆説思考に眼を覚まされる。 **選定理由** 生きる上で誰もがぶつかる壁が自分の中にあるとは誰も思っていない。「個」である自分の外に様々な社会問題が壁としてあると考える。しかし、本来人間は単独の「個」ではあり得ず、社会や環境とのつながりの中で生きてきたのだ。こうした筆者独自の視点を知ることで、私たちが直面している問題の全体像を把握しやすい。次代を担う若者に読んでもらいたい一冊である。	（2） （3） （6） （8）	
1478	明日の子供たち 幻冬舎 有川浩	児童養護施設を舞台に、そこに暮らす児童と職員の交流が描かれる。施設にいることや親がいないことは不幸だという考えが偏見であることを読者は再認識するだろう。人は皆どんな環境であれ幸せを求め、幸せになってよいのだという筆者のメッセージが温かい。彼らは社会の負債ではない、未来の財産だという価値観の変革を呼び起こしたいという筆者の言葉が心に残る。 **選定理由** 児童養護施設に暮らす思春期の子どもたちに寄り添いその成長を見守る職員と、自分たちの置かれた立場を冷静に見つめてながら様々な問題にまっすぐな気持ちでぶつかっていく少年少女の姿に感動を覚える。どんな環境であれ幸せになる可能性があるという著者の温かなメッセージが伝わってくる作品。	（3） （4） （9）	
1479	跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること イースト・プレス 東田直樹	人と会話することができない重度自閉症の著者が綴るエッセイ。私たちの日常にある感情や思惑、行動の原理を論理的な語り口で解き明かしてゆく。その言葉はいたってシンプルで優しい。季節や植物への感性も新鮮でみずみずしい。 **選定理由** 重度自閉症の著者が自分の言葉で冷静に自己分析している点に驚きを覚える。自分のみならず日常生活のあれこれへと思いを馳せ、シンプルな言葉で語っている。私たちは外見から人を判断してしまいがちだが、このエッセイを読めばそれはまさしく偏見なのだと実感するはずだ。	（1） （3） （9）	